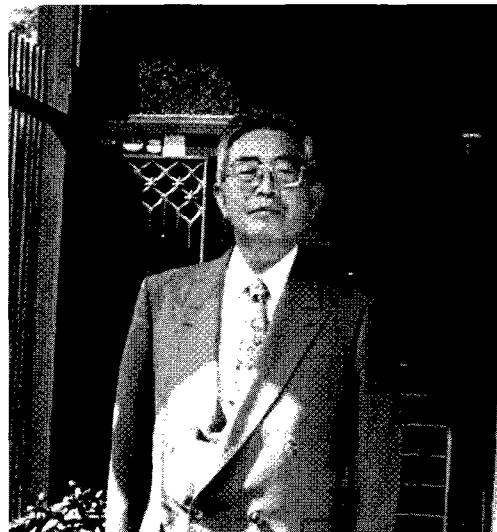


黒崎千晴先生を悼む

黒崎千晴先生（元筑波大学教授、1986～1987年本学会会長）は、去る2007年6月15日、肺癌にて入院治療中のところ、逝去された。享年83歳であった。先生はもともと心臓に持病を抱えられていたが、4月に癌が発見されてからは、医療関係者やお嬢様方に手厚い看護を受けながら静かに旅立たれたという。

先生は、1923（大正12）年10月18日、長野県に生をうけられた。筑波大学の前身である東京文理科大学を1949年に卒業された後、日本女子大学付属高等学校、茨城キリスト教学園高等学校、早稲田大学高等学院をへて、1979年に筑波大学に奉職された。筑波大学歴史・人類学系には、歴史学と地理学を同時に学べる高等師範学校地理歴史部の伝統を再生すべく、歴史地理学コースが新設された。先生は、1976年に着任された初代の菊地利夫先生とともに、その基礎作りに努められた。開学当初の歴史・人類学系には、ほかにも民俗学分野に千葉徳爾先生、文化人類学分野には川喜田二郎先生など鋤々たる地理学の先生方もおられ、大きな足跡を残されたが、コースの運営には専任の菊地先生、それを継いだ黒崎先生があたられた。今日の歴史地理学教室の学風と伝統は、これらの時期につくられた。黒崎先生が教室を主宰された時期には、上記の先生方も退官され、学位の審査など、初めての事ばかりのうえ、お一人でのコース運営であった。そのため、そのご苦労は並々ならぬものであったと推測されるが、先生も50代の働き盛りで、その達成感は、先生の充実した人生の中でも、晩年まで最も思い出深いものであったらしいことをお嬢様方からうかがっている。

先生は、衆を求めたり、恃むことのない性格であることもあって、私は、先生に関してはお名前ばかりで、研究や考え方をよく存じあげないまま過ごしてきた。私が先生の親炙に浴したのは、先生のご退官が近くなつてからのことであった。とくに筑波大学退官後、先生は八千代国際大学に勤めるかたわら、土浦市立博物館の館長を併任されていたが、大学図書館によく見



えられ、私の所にも立ち寄られ、直接お教えを受けたり、お話をうかがう機会が多かった。先生は取り組んできたり、進行中の研究の面白さを、いつも熱く語ってくださったが、私は先生の圧倒的な知識の量や切り口の鋭さに魅入られた。

先生の歴史地理学における貢献は、明治期の各種統計資料を、苦労して自ら発掘し、それらを駆使して、いわば近代の計量歴史地理学といえる分野を新たに開拓した点にあると思われる。先生は、内田寛一先生の門下生であったこともあって、当初にはとくに北信濃を事例として、近世の交通および流通の研究課題に取り組んでおられた。これらの研究課題の解明には資料的制約が大きく、全体像の把握が可能かどうか疑問を感じられ、「日本の社会が一般大衆を含めて、まとまりのある統合体となるのは、いつ頃、どういう過程を経てであろうか」、という課題に方向を転換されたという。1953年の頃であったという。明治期の各種資料目録や書誌解題は皆無の状態で、先行研究も乏しく、その後、国会図書館、統計局、内閣文庫をはじめ、図書館通いが始まった。当時のことでコピーもなく、府県統計書や勧業年報、商務局雑報など、関係があると予想された資料の所在調査と筆写に、

自由になる時間のほとんどを費やされたらしい。朝から夜までの校務と図書館通いで、家にはまさに寝に帰るだけで、家族の会話がほとんどない日も珍しくなかったという。新しい学問領域の開拓を目指した先生のご苦労が偲ばれる。

先生は、ご自分の研究成果の発表に関しては、常に実に抑制的でおられたので、この頃のご苦労や成果については、地理学界ではあまり知られていない。しかし、明治期の資料の所在に関する該博な知識から、先生は、一橋大学の日本経済統計文献センターが明治期の日本経済統計解題書誌を作成する際に意見を求められるほどで、先生もこの時期には地理学関係の雑誌よりも、むしろ「社会経済史学」に成果を発表されている。現に日本史や経済史の分野の方々から、先生の研究の面白さが評価されたように思われる。先生の研究領域は、交通・工業・都市といったオーソドックスな研究ばかりでなく、消費や教育水準の、あるいは洋法医療普及の地域的動向など、資料の関係から扱われにくくと考えられていたテーマにまで及んでいる。それらに共通する特徴は、厳密な資料吟味と、歴史的考察の場に空間的視座を導入しようし

たこだわりにあると考えられる。それが、明治期の教育水準における東高西低の実態やイノベーションの導入に関する新知見の提唱や、研究の質の高さに関する評価と結びついたと考えられる。なお、先生の学位論文は「明治前期における中心地の階層的配置に関する地理学的研究－岩手・宮崎両県を事例として－」というテーマであった。

先生は、「地理学を学ぶ者が、その殻に閉じこもっていては学問の進展は望めない」とのお考えから、筑波大学歴史地理学コースでも、学際的研究の必要性を主張し、実践された。そのこと一つをとっても、先生の卓抜した学問観がうかがわれる。明治期資料に関する先生の圧倒的知識を埋もれさせないように、密かに録音でもとって整理しようなどと仲間と話し合っていたが、実現せずに終わってしまった。残念でならない。しかし、先生が無垢な少年のように、研究の面白さを熱く語るお姿は、門下生や先生に接した多くの人達の今後の人生に勇気を与え、指針になり続けるものと、私は確信している。先生のご冥福をお祈りしたい。

(石井英也)